

納得の「か」をめぐって

井上 優

キーワード：疑問、納得、か、吗、嘛、対立命題可能、対立命題不要

要旨

日本語の文末助詞「か」には「疑問」と「納得」の用法がある。疑問の「Pか」は、「この文脈ではPと考えることができる（～Pと考えることもできる）」（対立命題可能）として仮説Pの真偽を問うことを表す。納得の「Pか」は、話し手が新情報Pに接して「この文脈ではPと考えればよい（～Pと考えられないわけではないが、～Pと考える必要はない）」（対立命題不要）という認識でいることを表す。対立命題可能と対立命題不要の関係は、日本語とは異なる形ではあるが、中国語の疑問の文末助詞“吗 ma”と自明・当然の文末助詞“嘛 ma”の間にも認めることができる。

1. はじめに

現代日本語の文末助詞「か」には、「みんなそろいましたか?」、「え、そうですか?」のような「疑問」の用法のほかに、下降イントネーションをとって、「会話の相手や状況から新しい情報を得て、それを心内で確認した」（日本語記述文法研究会 2003:49）ことを表す「納得」の用法がある。(1)、(2)は納得の「か」の例である。

- (1) A 「これで全員そろいました」
B 「みんなそろいましたか。では、出発しましょう」
(日本語記述文法研究会 2003:49)
- (2) A 「午後から雨が降るそうですよ」
B 「そうですか (わかりました)」
(同上：「わかりました」を追加)

森山(2000)は、納得の「か」を用いた文を「疑問型情報受容文」と呼び、疑問文と同じ「か」という形式が情報の受け入れを表す理由について、次のように述べている。

- (3) 疑問型情報受容文は、それまで自分が疑問視したり推測したりしていた認識

(先行認識)を前提として、新情報を導入することで、自分の認識を書き換えることを表すという意味になっていると言える。つまり、(事実扱いの)情報を受け入れることで、それまでの先行認識と現実の新しい情報とが、いったん対立関係を構成するのであり、そこに疑問文という形式が使われる理由があると言えるのである。これは、情報受容の一つの過程としての一時的な対立関係と言い換えてもよいだろう。(略) こうした意味は、選択関係意味論として提案した、疑問文の不確定という意味から説明できる。ここでも、「か」の基本的意味は、同じでないものがあるが完全には一つに絞れていない、という意味としてまとめることができるわけである。

(略)

情報の受容に対して、現実世界が我々の認識上の枠を外れてきわめて大きくずれている場合、我々は単純には受け入れられなくなる。これは話し手自身が疑うのであり、まさに疑問文の範疇に入ることになる。(略) 情報の受容か疑問かの違いは、自分の認識と現実としての情報とのギャップの大きさの違いであり、疑問型情報受容文と疑問文とは連続性を持っていると言ってよい。
(森山 2000:17)

疑問文「Pか？」は、「Pか (それとも～Pか)」のように、二つの命題Pと～Pがともに仮説として成立し、いずれか一方に絞れていないことを表す。同じように、「Pである」とは考えていなかった話し手が、「Pである」という情報に接し、その線で認識を改める場合も、その過程でPと～Pが心内に共存する状態が生ずる。その状態を表すのに、「同じでないものがあるが完全には一つに絞れていない」ことを表す「か」が用いられる。これが納得の「か」である。

森山(2000)のこの説明は、「か」が疑問と納得という二つの用法を持つことについて自然な説明を与えている。疑問の「か」と納得の「か」が連続性を持っているという指摘も妥当である。しかし、疑問の「か」と納得の「か」の関係はより具体的な形にとらえる余地がある。「か」に疑問と納得の用法があることの意味についても、もう少し掘り下げる価値がある。以下では、これらの点について議論をおこなう。

2. 「対立命題可能」と「対立命題不要」

疑問の「か」と納得の「か」の関係について考える際にヒントになるのは、許可表現「してもいい」と「すればいい」の関係である。

- (4) 先に行ってもいい。
- (5) 先に行けばいい。

「してもいい」を用いた(4)は、『先に行かない』でもよい」という含みを持つ。この場合、「先に行く」と「先に行かない」という二つの対立する選択肢が対等なものとして話し手の中で共存している。

これに対し、「すればいい」を用いた(5)は、『先に行かない』が不可というわけではないが、『先に行かない』である必要はない」という含みを持つ。この場合、「先に行かない」という可能性は完全には否定されておらず、話し手の中では「先に行く」と「先に行かない」という二つの選択肢が共存しているが、「先に行かない」の必要性・必然性が否定されている分、話し手の選択は「先に行く」のほうに傾いている。それゆえ、「勧め」の気持ちが感じられる許可表現になる。

このように、「Pしてもいい」と「Pすればいい」の違いは、「対立命題 \sim Pも可能である」(対立命題可能)と「対立命題 \sim Pは(不可というわけではないが)必要・必然ではない」(対立命題不要)という違いに還元される。「可能である」を「 \diamond 」、「必要・必然である」を「 \square 」で表せば、対立命題可能と対立命題不要の関係は(6)、(7)のように表される。

(6) 対立命題可能： $\diamond P$ かつ $\diamond \sim P$

(7) 対立命題不要： $\diamond P$ ($= \sim \square \sim P$)

対立命題可能と対立命題不要は同値ではない。しかし、その一方で、(7)に示したように、「 $\sim P$ は必要・必然ではない」は「Pは可能である」と同値であり、対立命題可能と対立命題不要はともに「Pは可能である」という意味を含む。また、対立命題可能は「 $\sim P$ も可能である」ことを表すが、対立命題不要においても「 $\sim P$ は不可である(Pでなければならない)」とまではされておらず、対立命題 $\sim P$ の可能性は完全には否定されていない。その意味で、対立命題可能と対立命題不要は、ともに「この文脈ではPまたは $\sim P$ である」ことを表すと言え、両者が同一の形式で表されることがあってもおかしくない。日本語の「か」に疑問と納得の用法があることも、まさにこのことが背景にあると考えられる。以下、具体的に見ていこう。

3. 対立命題可能・対立命題不要と「か」

(8)は疑問の「か」、(9)は納得の「か」の例である。

(8) (「太郎が来たかどうかわからない」として)

太郎は来ましたか？

(9) (「太郎が来た」と言われて)

あ、来ましたか。わかりました。

疑問の「か」は対立命題可能を表す。疑問文「Pか？」は文脈と対立しない仮説Pの真偽を問題にする文であり（井上・黄 1996）、(8)でも、「この文脈では『来た』と考えることができる（が、『来ていない』と考えることもできる）」として、話し手が「来た」という仮説の真偽を問題にしている。

一方、納得の「か」は対立命題不要を表す。(9)は、このタイミングで太郎が来るとは考えていなかった話し手が、「太郎が来た」という情報に接して、「この文脈では『来た』と考えればよい（『来ていない』と考えられないわけではないが、『来ていない』と考える必要はない）」という気持ちでいること、言い換えれば、話し手の認識が「来た」に傾いていることを述べている。納得の「Pか」は下降イントネーションをとともなうが、これも話し手が新情報を事実として認めつつあることを表すからである。

森山(2000)は、納得の「か」について「(事実扱いの) 情報を受け入れることで、それまでの先行認識と現実の新しい情報とが、いったん対立関係を構成する」と説明するが、この「対立関係」は、対立命題不要、すなわち「現実の新しい情報Pは可能である（先行認識 \sim Pが不可というわけではないが、 \sim Pと認識する必要はない）」という内容の関係である。また、森山(2000)が「疑問型情報受容文と疑問文とは連続性を持っている」と言うのも、疑問と納得が対立命題可能と対立命題不要の関係、すなわち「同値ではないが、『この文脈ではPまたは \sim Pである』ことを表す点では同じ」という関係にあることを指している。

「同じでないものがあって完全には一つに絞れていない」ことを表す「か」が、対立命題可能と対立命題不要の両方を表すことは、納得の「か」以外にも見られる。たとえば、納得の「か」と同じく下降イントネーションで発される「か」には、(10)のように、話し手の意志が当該の動作をおこなう方向に傾いていることを表すものもある。この場合も、話し手は「帰るか帰らないか（どうするか）」と迷っているのではなく、「帰ればよい（帰らなければならないわけではないが、帰らないとする必要はない）」という気持ちでいる。

(10) あ、もうこんな時間か。そろそろ帰るか。

方言に視野を広げれば、富山県井波方言の「カ」には、疑問、納得の用法のほかに、命令形に付いて「すればよい」という気持ちの許可的な指示を表す用法がある（井上 2006）。次の(11)、(12)は、それぞれ「先に行っていればよい（先に行っていなければならないわけではないが、『先に行かない』とする必要はない）」、「好きなようにすればよい（好きなようにしなければならぬわけではないが、『好きなようにしない』とする必要はない）」という気持ちの指示を表すが、この場合も「カ」は対立命題不要の気持ちを表す。

- (11) 「先に行っていればよい」という気持ちで)
先 行キタキヤ、先 行ツトレカ。(先に行きたければ、先に行っていな。)
- (12) 「好きにすればよい (あとはまかせる)」という気持ちで)
好キナヨーニ セツシャイカ。(好きなようにしなさいな。)

標準語でも、「先に行きたければ、先に行っている」、「好きなようにしろ」のような命令文は許可的な指示を表す(仁田 1991)。標準語にも「命令形+か」という形式があってもよいが、何らかの理由で欠けていると見られる。

このように、「か」に疑問と納得の用法(さらには井波方言の「命令形+カ」)があるのは、対立命題可能と対立命題不要が「この文脈ではPまたは~Pである」という共通点を有するために、「同じでないものがあるが完全には一つに絞れていない」ことを表す「か」が対立命題可能と対立命題不要の両方を表しうるからである。

しかし、対立命題可能と対立命題不要は同値ではないため、言語によっては、疑問と納得が同一の形式で表されないこともありうる。たとえば、中国語では、疑問は“吗 ma”(例 13)、納得は“啊 a”(例 14)のように異なる文末助詞で表される。

- (13) 你 是 日本人 吗? (あなたは日本人ですか?)
あなただ 日本人 疑問
- (14) (相手から「自分は日本人だ」と言われて)
欸, 你 是 日本人 啊! 我还 以为 你 是 中国人 呢。
え あなただ 日本人 a 私 てっきり 思っていた あなただ 中国人 文末助詞
(え、あなた、日本人なんですか! てっきり中国人だと思っていました。)

中国語の文末助詞“啊 a”は、その場の状況や情報が刺激となって、話し手の意識が当該のことがらに集中していることを表す(井上・黄 2014)。その場の状況や情報に反応する形で発話をおこなっていることを表すと言ってもよい。日本語では、先(14)のように納得の「か」に対応することもあれば、次の(15)、(16)のように「ねえ」、「よ」に対応することもある。

- (15) 真 热 啊! (暑いねえ!)
本当に 暑い a
- (16) (相手からの非難に対して)
我 又 不是 故意 的 啊!
私 だって ではない 故意だ の a
(私だってなにもわざとじゃありませんよ!)
- (朱 1981: 杉村・木村訳 1995:289)

次の(17)でも、その場の状況や情報に反応する形で疑問を発していることが“啊 a” (“呀 ya” は異形態) で表されている。

(17) (真冬なのに聞き手はTシャツ1枚で何事もない様子でいるのを見て)

你 穿 那么 一点儿, 冷不冷 呀?

あなた 着る そのように 少し 寒い-寒くない ya

(そんな薄着だと寒くないか?)

(井上・黄 1996:99)

前述のように、納得の「か」は「新情報を事実として認めつつある」ことを表すが、“啊”は、(14)のように納得の「か」で訳せる場合でも、話し手の意識が当該のことがらに集中していることを表すと考えられる。

4. 中国語における対立命題可能と対立命題不要

前節で述べたように、中国語では疑問と納得は異なる形式で表される。しかし、その一方で、中国語には、日本語とは異なる形で、対立命題可能と対立命題不要とが同じ形式で表されていると見られる現象がある。それは、疑問の“吗 ma”と、やはり ma と発音する「自明・当然」を表す“嘛 ma”の関係である。

“嘛”は、日本語では「…じゃないか」、「…すればいいじゃないか」と訳せることが多い。疑問の“吗”が文末に軽く添えて発されるのに対し、“嘛”は「それよりもやや低めの、幾分長く引き延ばす感じの特徴的な下降イントネーション」(木村・森山 1992) で発される。

(18) A: 这件 衣服 我 穿 太 花哨 了 吧?

この 服 私 着る あまりに 派手だ 文末助詞 確認

(この服、私には派手すぎるよね。)

B: 哪儿 花哨 呀? 挺 好的 嘛。

どこ 派手だ ya けっこう いい 文末助詞 ma

(え、どこが派手なの? なかなか似合うじゃないの。)

(井上・黄 2017:246-247)

(19) (「そんな仕事、引き受けなければいいのに」と言われて)

没办法 嘛! (しかたないじゃないか!)

どうしようもない ma

(井上・黄 2017:245、日本語訳変更)

(20) (聞き手が小声でぶつぶつ言っているのを見て)

有 意见 就 提 嘛, 你 怎么 不提 呀?

ある 意見 その場合 意見を出す ma あなたなぜ 意見を出さない ya

(意見があれば出せばいいじゃないか。どうして出さないの?)

(中国語文は呂主編 1999:375、日本語訳筆者)

自明・当然の“P嘛”は、考える必要がないことがら $\sim P$ を考えている聞き手に対して、「ここはPと考えればよい ($\sim P$ と考える必然性はない)」、あるいは「ここはPすればよい ($\sim P$ とする必要はない)」という話し手の意見を述べる表現である(井上・黄 2017)。「Pは自明・当然のことなのに、なぜ $\sim P$ と考えるのか? ここはPと考えればよい ($\sim P$ と考える必然性はない)」という気持ちが“P嘛”で表される。(18)は「あなたは『似合わない』と考えているが、そう考える必要はない。ここは『似合う』と考えてよい」という気持ちの発話、(19)は「あなたは『どうにかなる』かのように言うが、そのように言われる必然性はない。ここは『どうしようもない』と考えれば十分だ」という気持ちの発話である。また、(20)は「意見があれば出せばいい。遠慮する必要はない」という気持ちの発話であり、前述の井波方言の「命令形+カ」と同じく、許可的な指示を表す。

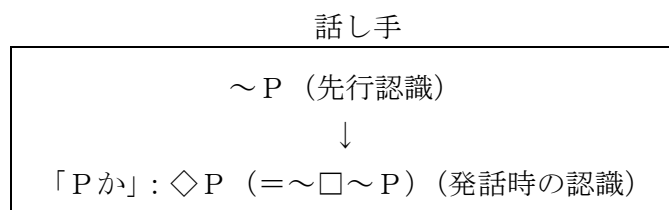
これらの意味記述からもわかるように、中国語の“嘛”は、納得の「か」とは意味が大きく異なるが、対立命題不要の表現と見てさしつかえない。日本語の疑問の「か」と納得の「か」、中国語の“吗”と“嘛”の関係を整理すると次のようになる。

(21)

	対立命題可能 ($\diamond P$ かつ $\diamond \sim P$)	対立命題不要 ($\diamond P (= \sim \square \sim P)$)
日本語	疑問の「Pか」	納得の「Pか」
中国語	疑問の“P吗”	自明・当然の“P嘛”

日本語の納得の「か」は、話し手の内部で「 $\sim P$ 」→「 $\diamond P (= \sim \square \sim P)$ 」という認識の変化が生じたことを表す。

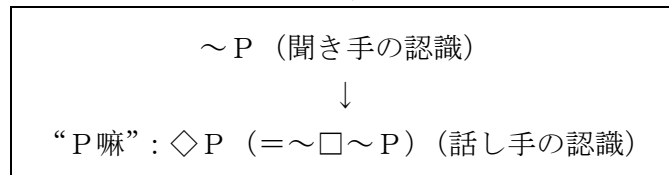
(22)



中国語の自明・当然の“嘛”は、聞き手の $\sim P$ という認識に対して、話し手が $\diamond P (= \sim \square \sim P)$ という認識を対峙させ、「 $\sim P$ 」→「 $\diamond P (= \sim \square \sim P)$ 」という形で文脈を展開させることを表す。

(23)

文脈



井上(2019 予定)は、日本語と中国語の感動詞の使用のあり方に関連して、日本語のコミュニケーションは「発話にともなう気持ちの動きを表出してみせる」ことが本質的に重要だが、中国語のコミュニケーションは「相手の発話に合わせて話を先に進め、文脈を構築していく」のが基本であることを指摘している。納得の「か」が話し手内部の心的状態の変化を表すこと、そして、自明・当然の“嘛”が文脈の展開に関わる表現であることも、このことと関係する可能性がある。今後の課題としたい。

参考文献

- 井上優 (2006) 「モダリティ」『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
- 井上優 (2019 予定) 「「気持ちの言語化」の日中対照」『場面と主体性・主観性』ひつじ書房
- 井上優・黄麗華 (1996) 「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184、国語学会(現日本語学会)
- 井上優・黄麗華 (2014) 「日中対照から見た中国語の文末助詞」『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版
- 井上優・黄麗華 (2017) 「中国語の文末助詞“嘛”の意味分析」『楊凱榮教授還曆記念論文集 中日言語研究論叢』朝日出版社
- 木村英樹・森山卓郎 (1992) 「聞き手情報配慮と文末形式」『日本語と中国語の対照研究論文集(下)』くろしお出版(合本『日本語と中国語の対照研究論文集』、1997年)
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4 モダリティ』くろしお出版
- 森山卓郎 (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- 呂叔湘主編 (1999) 《現代漢語八百詞 增訂本》、北京：商務印書館(牛島徳次・菱沼透監訳 2003『中国語文法用例辞典』東方書店)
- 朱徳熙(1981)《語法讲义》、北京：商務印書館(杉村博文・木村英樹訳 1995『文法講義 朱徳熙教授の中国語文法要説』白帝社)